

「シャー!!」

「いやぁ!離して!食べないで!」

半裸の女性をしっかりと包み込む巨大なアナコンダ。どんなにもがいても、疲れるだけだ。

蛇の巻きつきがきつくなり、骨が軋むような圧迫感が全身を襲う。

涙で滲む視界の中、顔を上げると、目に飛び込んできたのは、アナコンダの大きく開いた口だ。

鋭い牙と、深く暗い喉の奥が、彼女を飲み込もうと待ち構えている――

「カット!」

蛇も女性も動きを止めた。撮影クルーが慌ただしくやってきて、女性の体から蛇の包みを解く。

両者とも不満げな表情を浮かべる。

女優の美奈子が立ち上がり、監督に詰め寄る。

「冗談でしょ?いいところまで来ていたのに、なんで止めるの!」

「何が不満なんだ?蛇には肉人形を用意してある。これがスナッフフィルムじゃないんだぞ」

監督は冷たく言い放つ。

「でも、アンナタは私の友達よ!たとえ食べられたとしても、私を傷つけたりしない!」

美奈子の声には熱がこもっている。

「いいか、肉人形で我慢しろ。訴訟沙汰になったら面倒だ」

監督は他のスタッフに指示を出すために歩き出した。

美奈子はテラリウムに収められたアンナタを見やりながら、二人の絆を否定されたことに胸が締め付けられ

る思い。

彼女にとって、アンナタはただの蛇ではなく、心の奥底を理解してくれる唯一の存在。

◆◆◆

撮影が終わった深夜、スタジオは静寂に包まれている。

美奈子は忍び足でテラリウムに向かう。薄暗い廊下には彼女の足音だけが響き、心臓は高鳴る。

それは撮影のアドレナリンではなく、アンナタに再び会える期待感からだ。

テラリウムの前に立つと、ガラス越しにアンナタの姿が見える。

巨大なアナコンダの鱗は、月光を思わせる淡い緑色に輝き、まるで生きる宝石のようだ。

美奈子は初めてアンナタに出会った日のことを思い出す。

2年前、彼女はこの業界で心をすり減らしていた。

過酷な撮影現場で、アンナタはスタッフの無知な扱いによって弱っていた。

美奈子は監督に直談判し、アンナタを自分の手で世話することを申し出た。

それ以来、アンナタは彼女の心の空白を埋める存在となり、どんな時も彼女を裏切らない唯一の理解者だ。

テラリウムの隅には、胃液と唾液にまみれた肉人形が転がっている。

アンナタが誰もいない時に吐き出したのだろう。美奈子は小さく微笑む。

「よかった。これで私たちの時間が持てる」

テラリウムのドアに近づき、そっと開ける。

湿った空気が鼻をくすぐり、土と苔の匂いが彼女を包む。

まるで別の世界に足を踏み入れたようだ。

アンナタの鋭い感覚が美奈子を捉え、ゆっくりと顔を上げる。

その黄金色の瞳は、まるで彼女の魂を見透かすようだ。

「ねえ、アンナタ。寂しかった？」

美奈子はそっとアンナタの顎を撫でる。

鱗は冷たく滑らかで、指先に心地よい抵抗感がある。

蛇はそろそろと動き、美奈子の頬に寄り添うように体を擦りつける。

その動きは力強くも優しく、言葉のない会話のようだ。

美奈子はくすくすと笑い、心の奥に溜まっていた重荷が溶けていくのを感じる。

「撮影中、私を食べるチャンスがなくてごめんね。でも今は二人きり。誰にも邪魔されないわ」

美奈子はバスローブを脱ぎ、撮影中と同じビキニ姿を晒し。テラリウムの薄暗い光の下で、彼女の肌はほの

かに輝く。

アンナタの瞳を見つめると、野生の衝動と不思議な優しさが宿っているように思える。

もしこの蛇が本能に支配されたら、自分はどのようなのだろう？